

98名の医学士誕生

第86回卒業式



平成26年度大阪大学卒業式が3月25日午前11時より大阪城ホールにて行われた。平野俊夫総長は挨拶の中で、現代は人類史の中でグローバル化の第5波の中、多様性の爆発

する時代にあることを述べられ、争いのない「調和ある多様性」のためには論語にある「恕」のこころ、すなわち「寛容の心」が大切であることを説かれた。そして、適塾に端

を發する本学の歴史を振り返り、「人のため、世のため、道のため」の精神と、大坂町民の学問への情熱によって創設された大阪大学で学んだことを誇りにして欲しいと激励

された。また、その卒業式にともなう医学部医学科卒業式が同日午後3時30分より医学部A講堂にて行われ、本年度は98名の新医学士が誕生した。式において、金田安史医学部長より一人一人に学位が授与された。医学部長は挨拶の中で、大学には多様な視点や価値観を有する人材が多いので、大学に関わりながら様々な意見を聞き、自分固有の考えを述べることを積み重ねて、立派な医療者になって欲しいと激励された。金倉讓病院長は、大人になるにつれて創造力は減ってゆくがこれを努力して補ってゆくことが大切であり、さらに自分には厳しく、他人には優しくできる「頼もしい」人間になって欲しいと、応援の言葉をかけられた。最後に、岸本忠三医学振興銀杏会理事長より祝福の言葉が述べられ、学友会からのお祝い

が卒業生に送られた。理事長は、「手当て」という言葉には患者の患部に手を当てるといった意味が本来あるが、科学の進歩によりこのことが忘れられており、現代医学の中で細胞や分子を研究しているも、最初患部に手を当てることから始まったことを忘れないようにと述べられた。また、人生は約3万日あるが、年齢を重ね省みれば人生は一瞬であり、これからの人生を真面目に研鑽して欲しいと激励



第241号

公益社団法人
医学振興
銀 杏 会

(編集同人)

川越裕也 萩原俊男
門田守央 米田正太郎
杉本 武田雅俊
朝野和典 木村 正
黒木尚長

された。

定期総会のご案内

開催日 平成27年五月三十日(土)

開催場所 大阪大学医学部銀杏会館

級会・支部
交流会 正午～午後一時三十分

総 会 午後一時三十分～四時十五分
(三階阪急・三和ホール)

特別講演 テーマ「癌の難治性と癌幹細胞」

演 者 大阪大学教授 森 正樹先生

懇 親 会 午後四時三十分より
(二階レストラン「ミネルバ」)

が卒業生に送られた。理事長

は、「手当て」という言葉に 平成26年度「楠本賞」は満

は患者の患部に手を当てると 岡友祐君にその栄誉が贈られ

いった意味が本来あるが、科 了。また、平成26年度「山村

学の進歩によりこのことが忘 賞」は、蔡仕翰君と中井晶子

れられており、現代医学の中 さんと住本知子さんにその栄

で細胞や分子を研究してい 誉が贈られた。そして、平成

も、最初は患部に手を当てる 26年度博士課程優秀者として

ことから始まったことを忘れ 11名にその栄誉が授与され

ないようにと述べられた。ま た。

医学系研究科長就任のご挨拶



澤 芳樹
(昭55)

国内において確たる地位を築いておられます。しかしながら、日本の臨床医学のみならず基礎医学を取り巻く

このたび伝統ある大阪大学大学院医学系研究科長に就任させていただきました心臓血管外科学教室の澤 芳樹でございます。本学は、世界的な基礎医学研究や高度先進医療／未来医療橋渡し研究等の推進により大きな発展を遂げ、

環境は大変厳しい状況にあります。大阪大学医学部・医学系研究科の輝く未来のためには、基礎医学研究のさらなる発展とその成果を人類に役立てる基礎から臨床への橋渡し研究による未来志向の研究基盤、卓越した附属病院のさら

なる発展、そしてそれを受け継ぎ世界で活躍する次世代人材育成体制を構築することが重要と考えます。さらに大学改革や財政問題を克服しながらいかに医学系研究科の運営を充実させるか。例えば、私はこれまで研究成果を、橋渡し研究を介して臨床応用し、少しは成果を得つつあります。しかしこれからは、基礎医学が一層成果をあげ、橋渡し研究につながる未来志向の新しい研究基盤の仕組み作りを

お手伝いし、阪大発創薬／再生医療／医療機器が世界に発信され、大阪大学医学部・医学系研究科が生命科学の発展に大いに貢献し世界的に高い評価を受けるように、私自身がお役に立てればと考えております。財政的には、大型競争資金の獲得はもとより、一層の Donation や Funding などいろいろな資金を繋いでいってより Sustainable なマネジメントが必要と考えております。

であります。もとより浅学菲才の私ですが、マネージメントやチーム作りの経験、各省庁とのネットワーク人脈、などにより30数年間外科医として歩んできたこれまでの種々な臨床経験や行動力、忍耐力、判断力で残りの医学者としての人生を医学部・医学系研究科全体の未来志向研究基盤整備と次世代グローバル人材の育成に捧げ、世界に冠たる「チーム阪大医学部・医学系研究科」の発展に貢献することができればと考えています。ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

受賞

日本学術振興会賞 石井 優先生
(平10)

ガードナー国際賞 坂口志文先生
(昭51・京大医)

寄附御礼

当会の公益目的事業へのご寄附をいただき、誠に有難うございました。

平成26年12月26日

会員ご遺族様より、金一封をご寄附頂きました。

※公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会へのご寄附は、個人・法人とも税金控除の対象となります。詳細に関しては、当会事務局までお問い合わせください。

トピックス

ヒトとウイルスとの果てしない攻防

新興・再興ウイルス
感染症…ヒト免疫不全
症ウイルス (HIV man
immunodeficiency

virus; HIV) が、1983年に後天性免疫不全症候群(acquired immunodeficiency syndrome; AIDS)の原因として発見された以降も、これまでウイルス感染症ではないかと目されていた疾患の原因

ウイルスとして、次々とウイルスが発見されている。

1989年には、それまで非A非B肝炎と言われていた肝炎の原因ウイルスとしてC型肝炎ウイルスが同定され、

1994年にはカポジ肉腫の

原因ウイルスとしてカポジ肉腫関連ヘルペスウイルス (Kaposi's sarcoma-associated herpesvirus; KSHV) 若しくは human herpesvirus 8 (HHV-8) が発見された³⁶⁾。こういった新興ウイルス感染症のみならず、2003年には SARS coronavirus による SARS (severe acute respiratory syndrome) の outbreak (この時、水際侵入封じ込め対策で我国も騒然となった)、2009年には H1N1

我が国でも SFTS (severe fever with thrombocytopenia syndrome) 患者が報告された³⁷⁾、デング熱患者が70

提言

今、これから発表される予定の安倍首相の戦後70年談話

が話題になっている。今年の天皇陛下の新年にあたっての感想に「この機会(戦後70年)に、満州事変に始まるこの戦争の歴史を十分学び、今後の日本の在り方を考えていくことが、今、極めて大切なことだと思います」と述べておられ

年振りに出現した。規模は小さかったものの、一時国民が恐怖に曝されたのではないだろうか? トリインフルエンザは相変わらず脅威であり、牛口蹄疫も多大な損失をもたらした。

世界は益々小さくなり、人類未踏地へ足を踏み入れる。地球温暖化とも相まって、ヒトで見られなかった或いは我国で見られなかったウイルス感染症が普通にみられるようになるのでは

より大空襲を受け、街中が焼け野原となった日である。近所の住民は爆撃を逃れ山中に逃げ込んだものの母親は出産直後とすることで死を覚悟して家に留まったそうである。

ある。この中には種々の意味が含まれていると思われるが、我々は日本国民として、この機会に今一度わが国の歴史を真摯に学び、そして未来について考えなければならない時間

”敗戦”70年

幸いにも焼夷弾に焼かれることはなかった。記憶にはないことであるが、このような状況下を生き延びてきた者としてサラッと「終戦70年」と表現することには何か違和感が

ものが多いが、中には人獣共通にこの感染サイクルを回せるものもあるし、強い厳密性が見られないこともある。中でもトリとヒトインフルエンザウイルスの交雑は、これまで見なかった世界的脅威となり得るだろう。

私たちはどれだけウイルスを知っているか? 現時点で風土病的な脅威ではないウイルス感染症も明日には我国の恐怖になる可能性がある。ウイルス学

上田啓次(昭59)

が、先ずは「敗戦」と言う悲劇の原点に立つことを忘れてはならないと言っている。体験者の気持ちや真の日本国民の気持ちではないか。体験したことがない者がその時の状況を表現しようとすると間違いを犯す危険性がある。体験者の気持ちは「敗戦」であつて、決して「終戦」ではないのだ。「終戦」とは、当事者ではなく第三者から見た表現である。今必要なことは、当時の日本が世界的な侵略戦争に突入し、アジア諸国を侵略し、そして敗北したと言う事

を迎えたそうだが、彼は「単なる戦後ではない。悲惨極まる第二次世界大戦に敗北して70年、敗戦後70年であること肝に銘じるべきだ」と述べている。未来を語るのもいい

門田守人(昭45)

診療科紹介

耳鼻咽喉科・頭頸部外科

本教室は明治39年に開講し、私は平成21年から第8代教授として教室を主宰しています。教室の開講した年に倣い同門会は参九会と称しています。私の教授就任後、教室名を耳鼻咽喉科学から耳鼻咽喉科・頭頸部外科学へと改称しました。こうした改称は世界的な潮流であり、耳鼻咽喉科という言葉だけでは診療内容を十分に反映できていないためです。

現在教室には難聴・めまい、鼻・副鼻腔、音声・嚥下、腫瘍の4つのグループがあります。難聴・めまいグループでは、慢性中耳炎や真珠腫性中耳炎、耳硬化症に対する手術や、高度難聴者に対する人工内耳埋め込み術を行っています。特に人工内耳埋め込み術の実績は国内有数であり、西日本では最大となっています。難治性・再発性の良性発作性頭位めまい症に対する半規管遮断術や、メニエール病に対する内リンパ嚢開放術も手掛けており、めまいに対する外科手術が可能な国内における数少ない施設のひとつとなっています。従来の顕微鏡手術に加え内視鏡手術を積極的に導入していることも特徴のひとつです。また、外来では幼児難聴や補聴器の専門外来も設けており、幼児難聴外来では先天性難聴の遺伝子診断や遺伝子カウンセリングを行っています。

鼻・副鼻腔グループでは、慢性副鼻腔炎や好酸球性副鼻腔炎などに対する手術だけでなく、鼻・副鼻腔乳頭腫や嗅神経芽細胞腫などの腫瘍性疾患に対する手術も行っています。こうした手術は基本的に内視鏡下で行い、旧来の外切開を行う手術は稀となっています。内視鏡手術では頭蓋底

や眼球の副損傷が問題となることがあります。ナビゲーションシステムにより操作部位を術中にリアルタイムでモニターできるため、安全な手術が可能となっています。また、外来では嗅覚やアレルギーの専門外来も設けています。

音声・嚥下グループでは、声帯ポリープなどに対する喉頭微細手術や、声帯麻痺に対する喉頭枠組み手術などを行っています。手術だけでなく音声治療を積極的に行っていることは大きな特徴であり、ハイスピードカメラを導入し喉頭運動の精細な観察が可能となっています。また、嚥下障害に対する手術や嚥下訓練だけでなく、睡眠時無呼吸症候群や気道狭窄に対する治療にも積極的に取り組んでいます。

私の所属する腫瘍グループでは、口腔癌や咽頭・喉頭癌、甲状腺癌などの頭頸部腫瘍の治療を行っています。口腔癌に対しては手術治療を中心に、進行例では誤嚥防止手術を併施しQOLの改善を図っています。喉頭・下咽頭癌の治療では、化学放射線同時併用療法や経口的切除を精力的に行い、喉頭の温存に努めています。中咽頭癌の約半数は子宮頸癌と同様にヒトパピローマウイルス(HPV)により発生しますが、HPV陽性中咽頭癌に対する低侵襲治療の国内で唯一の臨床試験を主導しています。教室ではこの他にも様々な臨床試験に取り組みしており、頭頸部腫瘍の分野で本邦のオピニオンリーダーとなっています。

本教室は耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の疾患全般に対して高いレベルの医療を提供すると同時に、新たなエビデンスを構築するための臨床試験、そして新たな診断・治療法の開発につながる基礎研究、橋渡し研究を行っています。特に次世代のリーダーとなる人材の育成を教室の使命と位置付け、これまでも日本各地に教授を輩出してきました。現在は本学に加え、川崎

医科大学、兵庫医科大学、徳島大学、聖マリアンナ医科大学、近畿大学、奈良県立医科大学、新潟大学の計8大学の主任教授が同門となっています。今後も、変革と躍進をキーワードに教室を運営し、耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の発展に全力を傾注する所存です。

猪原秀典(昭62)



次回は乳腺・内分泌外科学の野口眞三郎先生にお願い致します。



…その142

理工学分野におけるシーズは数多く、政府は国を挙げて研究の果実の社会還元を図っている。シーズを社会に生かすこと、それ自体は結構なことである。厚労省や経産省はもとより、文科省までがこれに血眼になって参戦し、大型予算の獲得に奔走している。なぜシーズが大学に蓄積した

のか。これは文科省が少ないながらも運営交付金を各大学に一定額供与し続け、大学では自由な幅広い研究が息長くできたことによる。各大学に分配される運営交付金がいかに

風 土

に地方大学の活性化に役立っているかは、山中氏の研究成果の源流（奈良先端大）を見れば一目瞭然である。また近大マグロもしかりである。文科省は出口研究での大型予算の確保に狂奔せず、本来の姿に戻り基礎研究の醸成を通じ

た人材育成、シーズ育成に努めるべきである。また大学においては各学部個性、特徴を確保し、自由な発想による教育研究を庇護すべきである。このことが長い目で見て

くなり、20年後のシーズ激減が目に見えるようである。大学らしい大学、息の長い研究も容認できる自由度にあふれた大阪大学であってほしい。若い研究者の時間雇用が一般化し、ポスドクが巷にあふれる現状は大問題である。若い研究者にも最近とみに感ずることがある。それは学問的すそ野が狭く、対応能力に欠けることである。我々の分野で言えば、「脳科学者の脳知らず」を造ってはならない。

もつとも重要であることは言うまでもない。私は阪大医学部に最初の寄附講座を設立した。当時、「学問の場になぜ企業やねん」という批判もあったが「手技でテーマを選ぶのではなく、テーマで手技を選べる人材を育てよう」という思いでの連携であった。それから20年、今や寄附講座は溢れるほどある。しかし気になることは本来なら他大学にチャレンジすべき人材が、母教室から特任教授として赴任している例が多いことである。人は外に出してこそ生か

される。また新陳代謝も進む。「優秀な人材は外に出て早く独立する」という風土を確立し、安易に人材を囲い込むことは避けてほしい。阪大から人が外に出ることが阪大を強くすることであるから。

次は、阪大名誉教授・大阪警察病院 院長の越智隆弘先生（昭41）にお願いしました。

大阪府立病院機構 理事長 遠山正彌（昭47）